

阿久津 凍河(あくつ・とうが)

1、プロフィール

詩、俳句、短歌、川柳など、幅広く文芸に通じ、特に俳人としては「寂光」「暖鳥」などに属し、入賞歴も多数ある。また作詞家として、数多くの校歌を作詞。詩に翼が頻繁に登場することから「翼の詩人」と呼ばれた。

<生没>

1938(昭和13)年 ~ 2025(令和7)年7月15日

<代表作>

「冬」(詩誌「詩の座」入選作)

「神事とはいへど早乙女艶めけり」第49回芭蕉祭特選句

青森県高等学校文化連盟歌「北の翼」ほか多数。

<青森との関わり>

十和田市に生まれ、高校国語教師としての教育活動の傍ら、主に短詩系文学において活躍。三沢市を拠点に活動を続けた。

2、作家解説

十和田市に生まれる。本名は阿久津征夫。

1951(昭和26)年、青森県立三本木高等学校入学。この頃から啄木に憧れ、短歌を作り始める。1954(昭和29)年に大木惇夫の詩誌「詩の座」に処女作「冬」が高橋睦郎の詩とともに初入選。北原白秋、金子光晴、佐藤春夫、神保光太郎、深尾須磨子らが名を連ねる詩誌に入選し、詩が掲載されたことで詩人になれるかもしれないと思いはじめ。1957(昭和3)年、青森県立三本木高等学校を卒業。弘前大学教育学部国語科に入学。1959(昭和34)年に詩誌「弘前詩話会」同人となり、主宰の一戸謙三に師事し本格的に詩を学ぶ。その後、中寒二の詩誌「表現派」に参加、のち同人となる(昭

和 43 年)。

1961(昭和 36)年に弘前大学卒業。同年、十和田湖町立奥入瀬中学校勤務。

2 年後の 1963(昭和 38)年、青森県立田名部高等学校大間分校に転任してから、1999(平成 11)年に青森県立三沢高等学校を退職するまで、一貫して県立高校の国語教師として奉職すること受験指導においては定評があった。

1971(昭和 46)年、俳誌「河」に入会。間もなくして主宰の角川源義の「青森の冬は川も凍りつくからなあ」という呟きから「凍河」と号する。以後「寂光」「青嶺」「暖鳥」などに属し、社団法人俳人協会会員や青森県詩人連盟理事などを歴任。

詩、俳句、短歌、川柳など、幅広く文芸に通じ、中寒二をして「感性のおもむくままに自在に詩的言語をあやつる」と言わしめたごとく、作風は融通無碍、自由闊達である。また教育者としての立場から数多くの校歌を作詞。詩に翼が頻りに登場することから「翼の詩人」と呼ばれた。俳句に多くの入選歴がある。